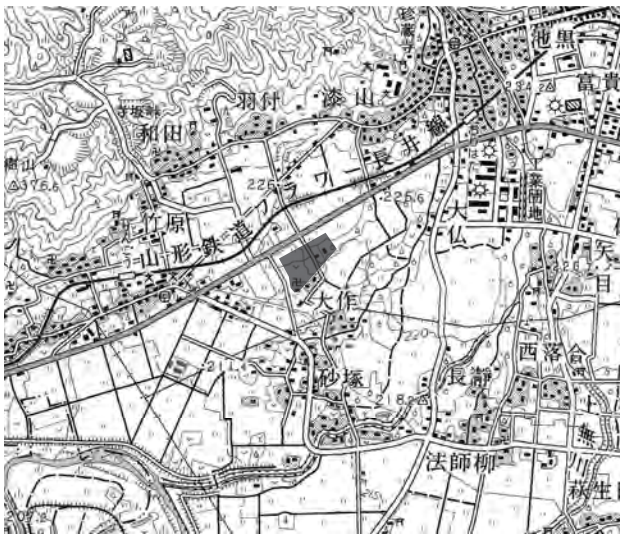
上大作裏遺跡

遺跡番号	平成17年度登録
所在地	南陽市大字砂塚字大作前ほか
北緯・東経	38度03分28秒・140度06分43秒
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査原因	一般国道113号赤湯バイパス改築事業
調査面積	1,800㎡
調査担当者	須賀井新人（調査主任）、小林圭一
調査協力	置賜教育事務所、南陽市教育委員会
遺跡種別	集落跡
時代	縄文時代、弥生時代、平安時代
遺構	土坑、陥穴、畝状遺構、ピット、柱穴
遺物	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、木製品 （文化財認定箱数：20）



調査の概要

上大作裏遺跡は南陽市街地から西方約4.5㎞に位置し、縄文・弥生・平安時代の三時期の集落跡と推測される遺跡である。その範囲は現況の地形等から推察して、広域的に河岸段丘上の東西約500m・南北約200mと考えられている。今回の調査は昨年度の試掘調査の結果に基づいて、遺跡範囲の東端域に調査区を設定し、８月21日から実施した。調査の進行に伴って、東側および南側の段丘縁辺部に遺物を多く含む堆積層の存在が確認されたため、途中一部を拡張して調査している。

また、今回の調査区西側で県教育委員会が試掘調査を実施したところ、約4,000㎡の範囲に遺構・遺物の散布が確認されたことから、平成19年度に第２次調査が行われる予定である。調査で得られた資料は整理作業を通じて検討を加え、次年度分と合わせて平成20年度以降に報告書を刊行するものである。

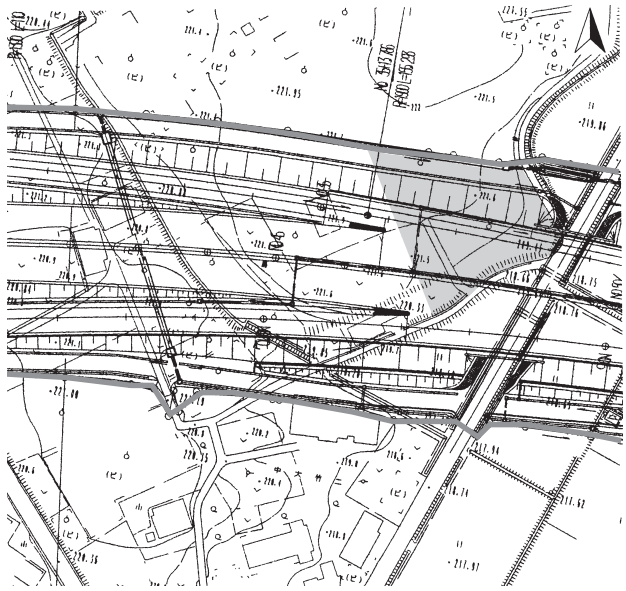
検出遺構

河岸段丘の端部に設定した調査区から検出された遺構には、縄文時代の陥穴、縄文または弥生時代の土坑やピット、平安時代の土坑や畝状遺構などがある。このうち、出土遺物等から構築時期が明らかなものは一部に限られる。調査区内に住居跡が存在しないことから、当地が各時代の集落の一部であったことは推測できるが、居住域は北側の微高地にある可能性が考えられる。１基見つかった縄文時代の陥穴や、平安時代の畝状遺構の存在から、当地は集落域の外縁として利用され、狩猟場や畑地であったものと想定される。

調査区東辺と南辺は段丘の縁辺に当たるが、この端部は幅３m程にわたって埋め立てたことによってできた地形であることが判明した。その堆積土内からは多くの遺物が出土しており、縄文時代の土器や石器と弥生・平安時代の土器が混在する状況を呈していた。

出土遺物

縄文土器と打製石器、弥生土器、平安時代の土師器や須恵器、それに時期不明であるが木製品が１点出土している。これらの大半は、縁辺部の堆積層内から出土したものである。土器類はすべて破片資料で、縄文土器では時期が明らかなものとして、陥穴から出土した前期末葉の大木６式土器がある。石器の点数は少ないが、石鏃・石篦・石匙などの器種が認められる。弥生土器は半截竹管等による２本一対の平行沈線を引いた文様に特徴があり、弥生時代中期後半の桜井式に比定される。平安時代の土器も器形が窺えるものはほとんどないが、須恵器の坏・甕などが出土している。縁辺部堆積層の最下層から出土した木製品は農耕具の鍬と判断され、その形状から古墳時代以降の製品と考えられる。



調査区概要図

ま と め

上大作裏遺跡は縄文・弥生・平安時代の三時期に営まれた集落跡である。調査の成果を要約すると以下のようになる。

遺構・遺物の分布状況や地形等から、当時の集落の居住域は調査区北側に広がっていたものと推察される。遺物は20箱分量を数えるが、中でも県内では資料数が少ない弥生土器が主体を占め、昨年度の調査で同時期の土器が一括出土した遺跡との関連も窺われる資料を得ることができた。

遺構配置図

調査区全景（上空から）

SK75陥穴（縄文時代）

SK30土坑（平安時代）

調査区縁辺の旧段丘地形

SK101土坑（平安時代）

調査区全景（南東から）

調査区東縁の堆積層

調査区南縁の堆積層

木製品（鍬）出土状況

弥生土器出土状況

弥生土器出土状況

縄文土器・打製石器

弥生土器

弥生土器

須恵器